



Title	『このついで』注解
Author(s)	後藤, 康文; Goto, Yasufumi
Citation	北海道大学文学研究院紀要, 167, 63(右)-82(右)
Issue Date	2022-07-19
DOI	https://doi.org/10.14943/bfhhs.167.r63
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/86535
Type	departmental bulletin paper
File Information	07_167_Goto.pdf



『いのついで』 注解

後 藤 康 文

一 一 序・薫物 一

【本文】（底本＝高松宮本）

春のものとしてながめさせ給ふ昼つ方、台盤所なる人々、

「宰相の中將こそ参り給ふなれ」「例の御にほひいとしくく」

などいふほどに、ついでに給ひて、

「昨夜より殿にさぶらひしほどに、やがて御使ひになむ。東ひむがしの対の紅梅の下に埋ませ給ひし薫物たきもの、今日のつれづれ

にこころみさせ給ふとてなむ」

とて、えならぬ枝しづかねに銀しろかねの壺二つつけ給へり。

中将の君、御帳のうちに参らせ給ひて、御火取あまたして、若き人々に、やがてころみさせ給ひて、少しさしのぞかせ給ひて、御帳のそばの御座おましにかたはら臥させ給へり。紅梅の織物の御衣せに、たたなはりたる御髪ぐしの裾ばかり見えたるに、これかれそこはかとなき物語しのびやかにして、しばしさぶらひ給ふ。

中将の君、

「この御火取のついでに、『あはれ』と思ひて人の語りしことこそ、思ひ出でられ侍れ」

とのたまへは、おとなだつ宰相の君、

「何ごとにか侍らむ。つれづれにおぼし召されて侍るに、申させ給へ」

とそそのかせば、

「さらば、継い給はむとすや」

として。

【注解】

○春のものとしてながめさせ給ふ昼つ方——本作は、在原業平の名歌「起きもせず寝もせで夜を明かしては春のものとながめくらしつ」（『古今集』恋三）を引用しつつ、帝の寵愛を一身に受ける中宮が、そうであるがゆえに昼間の時間を所在なくぼんやりと過ごしている、という設定で幕を開ける。○参り給ふなれ——「なれ」は聴覚による推定を表す助動詞「なり」の已然形。台盤所でくつろいでいた女房たちが、中宮の兄弟にあたる宰相の中将の訪れをまずは耳で察知し、すぐさま彼固有の芳香が漂ってきた、というのである。○例の御にほひ——例の「は底本ほか「上の」。「、い

(以) ↓漢字「上」の誤写とみて三手文庫本等により改めた。「例の」は連体修飾。当時の男性貴族は固有の薫りを身に纏うべく、香木の独自の調合に腐心した。さながら薫香による個体識別といった趣。○ほどに—ここは一語で接続助詞と解した。時間の経過にともなう偶然の因果関係を表す用法。～していたところ。～していた時に。○若き人々に—底本ほか諸本「わかき人々」。踊り字「々」の下にあった格助詞「に(二)」が、字形相似が原因で脱落したものとみて改めた。○中將の君—底本表記「中納言の君」。主格の格助詞「の」はない本も少なくないが、この箇所にはそれ以上に大きな問題がある。すなわち、中宮の帳台内に薫物を献上したこの人物には「給ひ」という尊敬語が用いられている点、中宮付き女房たちの領袖と見なされ、主人との「仲介役」としてはよりふさわしい「宰相の君」がいるにもかかわらず、ここで第二話の話主「中納言の君」が、大先輩を差し置いて「や、や、や、出て来るのは何とも不自然である点を考え合わせるならば、この「中納言の君」は、宰相の中將「中將の君」の誤記である可能性がきわめて高いのである。そのような形の異文が実際に伝わっているわけではないが、以上の理由から、当該本文は「中將の君」に改訂されねばならないと考える。以下「こころみさせ給ひて」までの主語は、すべて宰相の中將と解せてすっきりする。○御火取あまた—これに類する表現には「火取どもあまたして、けぶたきまであふぎ散らせば」(『源氏物語』鈴虫巻)などの先蹤があるけれども、ここは「火取」「独り」に「あまた」を番えたことば遊びで、「独り」なのに「大勢」とはこれいかに、という洒落が効いている。なお、「火取」「独り」は次の第一話において、「あまた」は最後の第三話において再出する。○中將の君—この人物の発言には一貫して尊敬語「のたまふ」が使用されているため、こゝも女房ではなく宰相の中將のことと解するのが妥当。ちなみに『源氏物語』では、光源氏・頭の中將・夕霧・薫が「中將の君」と呼ばれるが、夕霧と薫には別途「宰相の中將」の呼称も用いられている。薫物を焚かせて物語の場を現

出させたのみならず、みずからその口火を切るとともに、以下において批評家兼任切り役を彼が務める。いわば、「中将の君」＝宰相の中将こそが、中宮の退屈しを鮮やかに演出してみせる辣腕コーディネーターだった、というわけである。○この御火取のついでに――この御香炉がきつかけで。「火取」＝「独り」は第一話のキーワードとなる。○継い給はむとすや――私がそのエピソードを語り終えたら、みなさんであとの話をつづけてくださいますか、の意。宰相の中将が、女房たちには交換条件を提示し承引させてから、おもむろに語りはじめるのである。○とて。――とて」に句点を付したのは、ここで区切れを入れるための便法に過ぎず、他意はない。以下同じ。

【現代語訳】

春ならではの長雨ながめ、その「ながめ」の時節柄か、中宮様がほんやりと所在なくお過ごしあそばす（とある）日中、台盤所にいる女房たちが、

「あの物音や従者たちの声からして、どうやら）宰相の中将様が参上なさったようね」

「いつもの（すばらしいお香の）薫りがはつきりと（漂ってきたからには、もう間違いないわ）」

などという間に、（宰相の中将は中宮様の帳台のもとに）跪かれて、

「昨晚から父殿（のお屋敷）に（お仕えして）おりましたところ、その足でお使いに（参ったしいです）。（殿がお屋敷の）東の対屋の紅梅（の木）の下に（以前）埋めさせなされた練香を、今日の（昼間の）暇潰しに、焚かせてご覧になる、ということ（掘り出させなされて、中宮様の分を私にお託けなされたしいです）」

とおっしゃられて、（その薫物はというと、）極上の（紅梅の）枝に銀の壺を二つ（括り）つけておられた。

中将様は（それを、中宮様のいらっしやる）御帳台の中に献上なさって、（中宮方の）ご香炉を数多く使って、若い女房たちに早速試させなさって、（その様子に心惹かれた中宮様はというと、帳台から）ちらと（お顔を）覗かせあそばして、御帳台のそばの御座所に横向きに寝そべておいでであった。（そのお姿はといえは、）紅梅の織物のお召し物に、うねり重なった御髪ぐみの端だけが見えていたのだが、（そうした状況で、女房同士）この人あの人がとりとめのない世間話を小声でして、（宰相の中将様も、それを聞きながら）しばらくの間（御前に）控えていらっしやる。

（すると）中将様が、

「この火取がきっかけで、『まったく]かわそうなことをした』と（ある）人が（私に）打ち明けたその話が、ふと思ひ出されました」

とおっしゃるので、年配で落ち着いた感じの（女房）宰相の君が、

「いったい、どんなお話でしょうか。（中宮様には）ご退屈に思ひあそばしているのです、（是非）申し上げなさいと勧めると、（中将様は、）

「それならば、（あなた方が、私の話を）受け継いでくださいますか。（用意はよろしいですね）」

ということ（次のように語りはじめた）。

【余説】

本作が、『源氏物語』梅枝巻の、

このついでに、御方々の合はせたまふども、おのおの御使して、「この夕暮のしめりに試みん」と聞こえたまへれば、さまざまをかしようしなして奉れたまへり。「これ分かせたまへ。誰にか見せん」と聞こえたまひて、御火取ども召して試みさせたまふ。

といったシーンに触発されて成つたであろうことは、想像するにたたくない。けれども、これから構築される物語世界は、無論独自の趣向に彩られた展開を見せることになるのだ。

全体の「序」にあたるこの部分で重要なのは、【注解】でも述べたように、エリート貴族たる宰相の中将が、彼の姉妹にあたる女性、すなわち、帝の寵愛を一身に集めている中宮の、春の昼間の退屈しのぎを、薫物を契機とするリレー式物語をうまく誘導することで実現させている点である。口火となる「この御火取のついでに、『あはれ』と思ひて人の語りしことこそ、思ひ出でられ侍れ」という台詞を、真に受けてはなるまい。次に披露される「人の語りしこと」とは、彼の「創作」にはかならないからである。その才気と素早い機転とにまずは敬意を表してから、われわれは先へと進むべきであろう。

二 — 第一話・愛児の誕生 —

【本文】

「ある君達に、しのびてかよふ人やありけむ、いとうつくしき児さへ出で来にければ、『あはれ』とは思ひ聞えながら、きびしき片つ方やありけむ、絶え間がちにてあるほどに、思ひも忘れず、いみじうしたふがうつくしう、時々

はある所に渡しなどするをも、『いざ』などもいはでありしを、ほど経て立ち寄りたりしかば、いとさびしげにて、めづらしくや思ひけむ、かき撫でつつ見ぬたりしを、え立ちとまらぬことありて出づるを、馴らひにければ、例のいたうしたうがあはれにおぼえて、しばし立ちとまりて、

『おぼろけならじ』

とて、かき抱いだきて出でけるを、いと心苦しげに見送りて、前なる火取を手まさぐりにして、

こだにかくあくがれ出では薰物のひとりやいとど思ひ焦あがれむ

としのびやかにいふを、屏風のうしろにて聞きて、いみじうあはれにおぼえければ、児も返してそのままになむおられにし、と。

『いかばかりあはれと思ふらむ』

と、

『おぼろけならじ』

といひしかど、誰ともいはで、いみじく笑ひ紛らはしてこそやみにしか。いづら、今は、中納言の君」
とのたまへは、

「あいなきこのついでをも聞えさせ給ひてけるかな。あはれ、ただ今のごとは聞えさせ侍りなむかし」
とて。

【注解】

○『あはれ』とは思ひ聞えながら―「聞え」という謙讓表現から、相手の「君達」が高貴な家柄の女性であったことがわかる。「あはれ」はその「君達」を心から愛しく思う気持ち。係助詞「は」のニュアンスに注意。○いざ―底本ほか多くの伝本で「いま」。しかし、そのまま「今」としたのでは意味が通じない。よって、「さ(左)」と「ま(万)」のよくある誤写とみて、本文を「いざ」に改めた。「いざ」はいうまでもなく勧誘の感動詞で、後文の「さらばいざよ」と呼応。男は当初、自分をたいそう慕うのがかわいくて、子供を自邸に連れて行くこともままあったのだが、厳格な正妻がいる手前思いどおりにも振舞えなくなつたため、「いざ」と誘う機会が長らくなかつた、というのである。○「ただにかく―この副助詞「だに」は不審。今かりに「せめてこの子だけでも私と一緒にいてほしいと願う、そのわが子がこのように」の意に解したが、苦しいだろう。添加の副助詞「さへ」と同義に解せるなら話は簡単だが、両者の混同は中世以降に起こつた現象なので問題がある。○このついで―底本ほか諸本「こと、のついで」。「と」は「こ」「己」と「と(止)」の字形相似に起因する衍字、もしくは漢字「子」↓「事」の誤写とみて改めた。「このついで」には、「火取」の縁で「籠のついで」、そしてさらに「子のついで」の両義が掛けられていると読め、この箇所こそがほかならぬ本作篇名の原拠と目される。○今は―その女性のそれからの状況はどうだ、ほどの意とみる。すなわち、自分の話の「後日譚」を語るよう要求しているのであり、中納言の君のいう「ただ今のこと」と呼応。通説のごとく、今度は、次は、の意には解せまい。参考「今は内裏にのみさぶらひたまふ」(『源氏物語』桐壺卷)「雨となり、雲とやなりにけん、今は知らず」(同葵卷)「今は御名をば、草の庵となむつけたる」(『枕草子』「頭中将のすずるなるそら言を聞きて」の段)等々。○聞えさせ給ひてけるかな―底本はか諸本「聞えさせてけるかな」。尊敬語欠落の背景に二人の親密な間柄

を想定することもできようが、ここでは、「聞えさせ」のあとに元来「給」一字があったものと考えてこれを補った。「てける」には、「できればしらない方がよかつたのに、とうとうしてしまつた」という含みがある。

【現代語訳】

「ある高貴な女性に、人目を忍んで通う男がいたのだろうか、たいそうかわいらしい子供まで生まれたので、(相手の女性を)『愛しい』とは思ひ申し上げながらも、(彼にはすでに)口喧しい奥方がいたのだろうか、(不本意にも)なかなか訪れられない状況であつたところ、(はじめのうちは、幼いわが子が自分を)恋い慕うのが愛くるしくて、時折自邸に伴つたりしていたのを、(このところは)おのずと憚られて、『さあ(一緒に)行こう』などともいわないでいたのだが、しばらく経つて立ち寄ると、(子供が)たいそう寂しうであつて、(男は)そんなわが子を愛しく思つたのだろうか、(頭を)撫でながら面と向かつて腰を落ち着けていたのだけれども、(そのままそこに)留まることができない用事があつて出かけるのを、(一緒に)行くことが(習慣になつていたので、いつものように)父の後を追つて)ついて来るのがかわいそうに思われて、暫時足を止めて、

『じゃあ、(久しぶりに)あちらへ)行こうよ』

といつて、(子供を)素早く抱いて出て行つたのを、(母親は)ただ(胸が)痛くなる様子で見送つて、目の前にあつた香炉を手慰みにして、

(せめてこの子だけでもそばにいてほしいと願う、その)わが子がこうしてあてどなく出て行つたならば、(この)薫物の火取ではないけれど、私は(ぼつんと)独りで、これまでにもまして狂おしい恋しさに苛まれるの

『このついで』 注解

だろうか。

と小さな声でいうのを、(出ようとしていた男が) 屏風の後ろで(偶然) 聞いて、心底愛しく思われたので、幼子も戻してそのままおのずと留まってしまった、と。

『(その人は今) どれほど(相手の女性を) 愛しいと思っていることだろうか』

と(いい、さらに、)

『それはそれは) 並々ではないだろう』

といったのだけれど、(彼は結局、その女が) 誰であるかも明かさず、たいそう笑つてうやむやにして、それでお終いになってしまったのだよ。(これで、約束は果たしたよ。) さあ、(この女の) 近況は(どうかね)、中納言の君」とおっしゃると、(指名を受けた中納言の君は、)

「(中将様ったら、火取の) 籠ならぬ子をきっかけとする生憎なお話を、(中宮様に) 申し上げなさってしまったことですね。ああ(仕方ありませんわ)、(その女性の) 最近の様子(について) は、(私がこれから) ご報告しましょうね」

と(次のように語りはじめた)。

【余説】

第一話は、『源氏物語』帚木巻で頭の中將が語る「常夏の女」の話(のちの夕顔との逸話)をいきおい想起させるのが、人物設定や内容は当然のごとく異なっており、その差異の意味を弁えつつ、眼前に用意された独自の趣向を味わ

わなければなるまい。特に、「火取のついで」↓「籠のついで」↓「子のついで」という意味変換の妙が本話の核心となっている点には、十分な注意を払う必要がある。

ところで、第一話の中身は伝聞譚という建前があるため、丁寧語「侍り」が用いられることはないが、この現象はわずかな話外においても同様であり、こうした事実からも、本話の話者「中将の君」が宰相の中将その人であることが裏づけられよう。

三 — 第二話・愛児の死 —

【本文】

「去年の秋のころばかりに、清水に籠りて侍りしに、かたはらに、屏風ばかりをものはかなげに立てたる局の、にほひいとをかしう、人少ななるけはひして、折々うち泣くけはひなどしつづ行ふを、『誰ならむ』と聞き侍りしに、『明日出でなむ』との夕つ方、風いと荒らかに吹きて、木の葉ほろほると、瀧の方さまにくづれ、色濃きもみぢなど、局の前にはひまなく散り敷きたるを、この中隔ての屏風の面つらに寄りて、ここにもながめ侍りしかば、いみじうしのびやかに、

『厭ふ身はつれなきものを憂きこともあらしに散れるこの葉なりけり』

風の前なる』

と、聞こゆべきほどにもなく、聞きつけて侍りしほどの、まことにいとあはれにおぼえ侍りながら、さすがにふと

いらへにくく、つつましくてこそやみ侍りしか」

とこへば、

「いと、『さしも過ごし給はざりけむ』とこそおほゆれ。さても、まことならば、口惜しき御ものづつみなりや。いづら、少将の君」

とのたまへば、

「さかしうものも聞えざりつるを」

といひながら。

【注解】

○くづれ—底本ほか「くつれ」。「くづれ」を「くぼれ」の誤写とみる松本裕喜説もあるが、しばらく現本文のままとする。○憂きことも—底本ほか「うきことを」に作るが、このままでは意味不通。「も（毛／茂）↓」を（遠／越）の単純な誤写とみて改めた。○散れる—「木の葉」が風に散っている状態に、「子」が夭折した状況を重ねた表現とみる。○この葉—「こ」は「木」と「子」の掛詞。○聞こゆべきほどにもなく—このままでは接続が悪いので、下に「いふを」を補って解釈した。○さすがにふといらへにくく、つつましくてこそやみ侍りしか—愛児を亡くした隣人の懊悩があまりに深刻なためである。ことばをかけることが遠慮されたのも当然であろう。○まことならば—あなたのおっしゃることが真実ならばの意に、この話が実話ならばの意を込める。○さかしうものも聞えざりつるを—これまで（中宮の御前で）筋道立ててうまくお話をした実績もないのに、という少将の君の謙辞。彼女にはもちろん、物語を「継

く」用意もあれば自信もある。

【現代語訳】

「去年の秋の季節ごろに、清水寺に参籠しておりました時に、すぐ横に、屏風だけを申し訳程度に立て（て仕切つ）た局の、（薰物の）においがたいそうすばらしく、（お供の）人があまりいない感じがして、（主人が）時折急に泣く様子などをうかがわせながら読経するのを、『いったい、どこ（の）どなただろうか』と（思つて）聞いておりましたところ、『いつまでもこうしているわけにもいかないので、明日（お寺を）出てしまおう』と思つておりました（日の）夕方、風が荒々しく吹いて、（山の）木の葉がはらはらと、（音羽の）瀧の方角に（まるで大きな塊が粉々になつて）崩れ（落ちるように吹き散らされ）、色の濃い紅葉なんか（私どもの）局の前にはびっしりと散り敷いていたのを、先ほどの中仕切りの屏風のすぐそばに寄つて、（お隣はいわずもがな、この）私も（感慨を催されて）ほんやりと見ておりましたところ、たいそう小さな声で、

『生きてるのがいやでたまらないわが身は、（こうして）平然と命存えているのに、何の辛いこともないであらうに散ってしまった木の葉、否、死んでしまったあの子だったのだなあ。

風に翻弄されてあえなく散る木の葉のように、脆くはかない人の命よ』

と、（はつきりと）聞き取れる音量でもなく（つぶやいたのを）、（かろうじて）耳で捉えて理解しました時の、それはそれらしいそうしみじみと胸を打たれましたことといったら。とは申せ、（事情が事情だけに）咄嗟に反応しづらく、結局は（歌を詠むことも）遠慮されてお終いになりました」

という、

「ほんとうに、『あなたともあるう人が』まさかそのように（滅多とない機会を）お見過ごしにはならなかっただろう』と思われるよ。それにしても、（おっしゃることが）真実ならば（そして、実話ならば）、残念なご遠慮深さではないか。さあ（お次は）、少将の君」

とおっしゃるので、

「（私はこれまで、中宮様に）上手にお話を申し上げたこともないのに」
といいながら（次のように語りはじめた）。

【余説】

第一話の「君達」の「ただ今のこと」が語られる第二話の読解こそが、本作の理解を大きく左右することになる。すなわち、本話の主人公は、きわめて深刻な悩みを抱えて清水寺に参籠し、時折泣きながら勤行していたというが、その原因が「木の葉」ならぬ「子（の葉）」を亡くした悲運にあったことが、彼女の口からひっそりと漏れ出た独詠歌から察知され、さすがの中納言の君も、その場で「お気の毒に」などと気軽に応じることができなかった、という仕立てになっているものと考えられるのである。

話を聞き終えた中将の発言「まことならば」云々はその実意味深長で、この「体験談」が「それごとく」虚構であることを示唆している。

四 — 第三話・出家 —

【本文】

「をはなる人の、東山わたりに行ひて侍べりしに、しばししたひて侍りしかば、あるじの尼君の方に、いたう口惜しからぬ人々のけはひあまたし侍りしを、紛らはして、『人にしのぶにや』と見え侍りし。もの隔ててのけはひのいと気高かう、ただ人とはおほえ侍らさりしに、ゆかしうて、ものはかなき障子の紙に穴かまへ出でて、のぞき侍りしかば、簾に几帳添へて、きよげなる法師二三人ばかり据ゑて、すべていみじくをかしげなりし人、几帳の面に添ひ臥して、このゐたる法師近く呼びてものいふ。

『何ごとならむ』と聞きわくべきほどにもあらねど、『尼にならむと語らふけしきにや』と見ゆるに、法師やすらふけしきなれど、『なほなほ』とせちにいふめれば、『さらば』とて、几帳のほころびより、櫛の箱の蓋に、『丈に一尺ばかりあまりたるにや』と見ゆる髪の毛、筋・裾つきいみじうつくしきを、わけ入れて押し出だすかたはらに、今少し若やかなる人の、『十四五ばかりにや』とぞ見ゆる、髪丈に四五寸ばかりあまりて見ゆる、薄色の濃やかなる一襲、掻い練りなど引き重ねて、顔に袖を押しあてていみじう泣く、『おととなるべし』とぞおしはかられ侍りし。また、若き人々二三人ばかり、薄色の裳引き掛けつつゐたるも、いみじうせきあえぬけしきなり。『乳母だつ人などはなきにや』とあはれにおほえ侍りて、扇のつまにいと小さく、

おほつかな憂き世背くは誰とだに知らずながらも濡るる袖かな

と書きて、幼き人の侍るしてやりて侍りしかば、この『おととにや』と見えつる人ぞ、書くめる。さて取らせられたば、持て来たり。書きざまゆえゆえしうをかしかりしを見しにこそ、悔しうなりて」などいふほどに、上渡らせ給ふ御けしきなれば、紛れて、少将の君も隠れにけりとぞ。

【注解】

○をばなる人―底本表記「おはなる人」。「祖母なる人」・「伯母／叔母なる人」両方の可能性があるものの、ここは第三者の視点ではなく自分との血縁関係をみずから述べている箇所なので、後者の方がふさわしいだろう。参考「ばなる人の田舎より上りたる所にわたいたれば」（『更級日記』）。○したひて―「したふ」という動詞は、第一話において父親を思慕する児の印象的描写にも用いられていた。ここは、後を追う、ついて行くの意。○見え侍りし。もの隔てての―底本「もへたてての」。このまま「…見え侍りしも、隔てての…」と読むのは無理がある。よって、「も」と「へ」の間にもとは「の」の字が存在したとみて、三手文庫本等によりこれを補った。「もの」が「障子」であることはすぐに判明する。また、「見え侍りし」の連体形終止にも特に問題はない。参考「昔物語めきておぼえはべりし」（『源氏物語』帚木卷）「故母の常に苦しがり教へはべりし」（同常夏卷）「三条宮にはべりし小侍徒はかなくなりはべりにけるとほの聞きはべりし」（同橋姫卷）など。○障子―襖か衝立。明り障子ではない。念のため。○紙に―現存諸本すべて「かみの」に作る。今、「の（乃）」↓「に（爾）」の誤写を疑い改めてみた。○聞きわくべきほど―この「ほど」は距離を表す。○「なほなほ」とせちに―底本文「なをしせちに」。「し」は踊り字「く」の単純な誤写だが、他本により「なほなほせちに」と改訂しただけでは不十分。この「なほなほ」は、剃髪をためらう法師たちに「後生ですか

ら」と「せちに」要請する主人のことばとみるべきであるため、引用の格助詞「と」一字の脱落を想定して下に補う必要がある。参考「わざとも見入れぬ山の方をながめて「なほ、なほ」と切にのたまへば」（『源氏物語』夕霧巻）「皇

后宮今日明日出でさせたまひなむとするを、切に「なほなほ」と聞えさせたまふ」（『栄花物語』かかやく藤壺）など。

○幼き人——ここでの子供の登場は、たまたまではなく計算された設定と考えられる。○悔しうなりて——文字の美しさ等見た目のすばらしさだけが原因ではなく、返歌の内容から、相手方の深刻な事情＝愛児を喪った若い母親の遁世願望が判明したため、自分の差し出た行為を後悔したものとみたい。○少将の君も——帝の渡御を機に、話を聞いていたほかの人々はもちろん、話し終えたばかりの少将の君までもが、慌てて物語の舞台から去るのである。

【現代語訳】

「（私の）伯母にあたる人が、東山近辺で仏道修行しておりましたので、しばらくつき随っておりましたところ、（宿所の主人である）尼君の（お部屋）の方に、それほど身分が低くはない人々の気配がたくさんしましたのを、（彼らは正体を知られないように）ひた隠しにして、『極秘裏（の行動）なのだろうか』と（私には）見えました。物越しに伝わってくる（主の女性の）雰囲気がないそう高貴で、（とても）並の身分の方とは思われませんでしたので、（誰なのか）知りたくて、しつかりした作りでもない襖障子の紙にうまく（覗き）穴を拵えて、（向こうを）覗きましたところ、簾に几帳を添えて（姿を見られないようにし）、身なりのきちんとした法師三三人ほどを座らせて、どこを取ってもたいそう素晴らしく見えた人が、几帳のそばに添い臥して、この座っていた法師を近くに呼んで（何やら）話をする（のでした）。

『(いったい) どんな話なのだろうか』と、(その内容を) 聞いて判別できる距離でもありませんが、『尼になりたいと相談する様子だろうか』と目えたところ、法師は躊躇っているようでしたけれど、『後生ですから』と切実にいうようなので、(法師も) 『そう(までしておっしゃるの) ならば』といって(やむなく承諾すると)、(主の女性が) 几帳の切れ目から、櫛の箱の蓋に、『身の丈に一尺程度余っているだろうか』と見える髪で、筋や裾つきがとても美しいのを、(幾重にも) 曲げて入れて押し出すその傍に、(主よりは) もう少し若い感じがする人で、『(年は) 十四五歳ほどだろうか』と見え、(かつ) 髪は身長より四五寸程度余って見える人が、薄紫色のきめ濃やかな(衣裳一襲(の上) に、(紫の) 練り絹などを重ねて着て、顔に袖を押しあててはげしく泣くのは、『きつと) 妹君に違いない』と自然に推察されました。また、若い女房二三人ほどが、薄紫色の裳を(袴の上に) 纏いながら座っていたのも、溢れる涙を堰き止めがたい様子です。『乳母格の(頼れる) 女房はいないのだろうか』と気の毒に思われまして、(手許にありました) 扇の端にたいそう小さく、

(赤の他人ながら) 気がかりなことです。こうして辛いこの世を遁れるのはどなたかとそれさえ存じ上げないながらも、(涙で自然と) 濡れる(私の) 袖であることです。

と書いて、幼い子供が(私のところに) おりましたのに命じて(先方に) 届けて終えまましたところ、先刻の『妹君だろうか』と見えたほかでもないその人が、(返信を) 書くようです。そして(すぐに書き終わって) 手渡したので、(その子はそれを、こちらに) 持って来たのです。(私は直ちに開けて、) 書きぶりに風格がありすばらしかったのを見たその時になって、(自分の軽率な行爲を) 後悔する心境に陥りまして」

などと話す時分に、帝が(こちらに) お出でになるご様子なので、(皆) それどころではなくなって、少将の君も(急

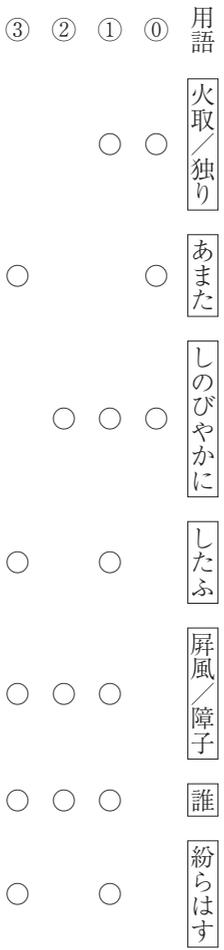
ぎ物陰に) 隠れたということだ。

【余説】

第三話は前話の女性の後日譚を企図したものと解せる。愛児夭折の悲しみを癒すことができなかつた彼女が、つい
に出家を強行するに至つたというわけである。そのような事情は話中のどこにもはつきりと語られているわけではな
いけれども、少将の君が受け取つた妹君からの返信にそれが暗に記されていたと、そう考えることは許されよう。

ある高貴な姫君の男との不安定な交際と愛児の誕生↓愛児の突然の死を受け止めきれない母としての苦悩↓遁世の
決意と決行と、全三話がゆるやかな連続性をもつて語り継がれ、帝の訪れを合図に、中宮の「今日のつれづれ」を慰
めた物語の場にも、突如終止符が打たれるのであつた。こうした本作は、その構成の緻密さと展開の巧みさにおいて
とりわけ傑出した短編物語だと、高く評価することができるのではなからうか。

さて、最後に、序(①)・第一話(①)・第二話(②)・第三話(③)を通して見て取れる用語の相互連関の様相をま
とめてみると、およそ次のようになる。いうまでもなく、凝らされた趣向である。



用語

ものはかなげ／し

聞こゆ／聞きわくべきほどにも

口惜し

④

①

②

③

○

○

○

○

○

○